

元春野町役場、唐音の切抜の水門、第 34 番札所種間寺の横を流れ、高知市に入ると第 33 番札所雪蹊寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいる。

水路は川舟の往来にも使われ、“運河”の役割も果たしていた。古い町並みが残る新川の集落は、物資の集散地として大きくなったと言われている。兼山は重労働の治水工事に、長宗我部の遺臣たちを起用した。藩の兵農分離策で農民になっていた彼らは郷土にとりたてられると不満をやわらげ、先頭に立って新田開発に活躍した。このあたりに兼山の手腕が光るが、あまりに厳しい施策に非難の声が高まり、寛文 3 年（1663）権力の座を追われ失職、3 か月後に急死する不遇の生涯を終えた。遺族も 40 年も宿毛に幽閉される悲劇を生んでいる。この時の野中兼山の四女、婉（えん）の物語が大豊町本山出身の大原 富枝（おおはら とみえ）の小説「婉という女」で有名になった。また女優岩下志麻が、凜とした女を演じた 1971 年、今井正監督の映画「婉という女」が当時、話題になった。その父、兼山の銅像が、所領していた大豊町本山の帰全山公園に工事図面を手にして立っている。《得られる知恵・教訓》

堰構造などの工夫に学ぶことや八田堰や用水路は今も立派に機能して、現在の高知県発展の礎となったことを教えている。



図 1 野中兼山が整備したとされる堰、用水、堤防（出典：仁淀川河川整備計画）

次に愛媛県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例を 2 つ選び、以下に述べる。

ウ) 愛媛県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例

① 菖蒲堰の四カー水（しかいちみず）（東温市）（表 6 の番号 9）

重信川の上流の愛媛県東温市には、菖蒲堰（しょうぶぜき）（写真 1、2）がある。昔そこから田んぼの水を取っていた。菖蒲堰には、上堰と下堰があった。渇水時には、上流の上堰で水と取ってしまうので、下流の下堰では水が取れなくなってしまうことが度々あった。堰からの取水は当時の農民にとっては死活問題で、水争いが繰り返されてきた。そうした対立の中で、水を分け合う取り決めが生まれた。その取り決め、約束が「大落水（おおおちみず）」という慣行である。これは、下堰側の地区で用水が不足して、番水制度を実施しても満たされない時に、上堰の地区に請求して、その分水の一部を受益するというものであった。下堰門樋前に分水を立てて水量を計りながら、四

日四夜を一区切りとして実施するもので、四カー水（しかいちみず）と呼ばれていた。水が不足する時に、上流が4日に1日、下流に水を融通する仕組みである。

現在でも渇水調整は、大変難しい面がある。水の権利は、法定の水利権以外に、地域の慣行があることを知ることが大切である。このような、上下流の対立の歴史から生まれた渇水時の水を分け合う工夫に学ぶことが必要である。

四国防災八十八話の 65 話の中で、明治九年（1876）の水争いのことが次のように紹介されている。「明治九年（1876）の水争いは、下堰側が請求した大落水が、上堰側の都合で遅れたことに原因がありました。6月30日、上堰の落水が遅いため、下堰側の農民は怒り、数百人が堰を切り崩すという実力行使に出、双方に負傷者が出ました。早速、巡査や戸長らが仲裁に入りましたが解決に至りませんでした。七月四日になって巡査本署から仲裁案が提示されましたが、上堰側は「全ての田んぼの灌水は不可能で、苗も枯らせてしまう」として応じませんでした。そこで七月七日に下堰側の村々は、愛媛県権令岩村高俊に解決を依頼しました。



写真1 菖蒲堰とその受益地（2007年10月撮影の上書き）



写真2 可動堰になっている現在の菖蒲堰

愛媛県は調査を行い、上堰側に対して「八月三日の午後六時から同月七日午後五時までの九六時間、三カ村へ大落水を執行せよ」と命じ、8月10日には今後の大落水について下堰側に対して「菖蒲堰分水は従来からの明確な規定はなく、年々臨時処分をして分水する慣行であるので、そのままこれを据えおくことにする。しかし、今後は役場が指導して、上下の水勢を見計らい、水量を加減して配水をし、特別に用水が不足すれば大落水を実施する」というような通知を出し、また上堰側にも「下堰側に用水が特に不足したときに臨時差配をするよう区長にも達しておいたので、その指示に従うこと」というような指示をしました。」とあり、愛媛県が渇水調整の調停役を行ったことが分かる。

このように上下流の対立の歴史から渇水時の水を分け合う先人の工夫に学ぶことを忘れることなく、菖蒲堰の大落水（おおおちみず）の考え方、現在にも通用する渇水時の水融通の知恵を伝承する必要がある。そのような点で菖蒲堰の四カー水（しかいちみず）は防災風土資源といえる。

《得られる知恵・教訓》

大落水（おおおちみず）の考え方、現在にも通用する渇水時の水融通の知恵など上下流の対立の歴史から生まれた渇水時の水を分け合う工夫に学ぶことを教えている。

② 銅山川疏水の碑（四国中央市）（表6の番号11）

愛媛県四国中央市上柏町の戸川公園（写真1）には、銅山川疏水功労者頌徳の碑（写真2）がある。



写真1 銅山川疎水功労者頌徳碑がある戸川公園
(2007年撮影写真に上書き)



写真2 銅山川疎水功労者頌徳碑

昔、寡雨地域の宇摩地方（現在の愛媛県四国中央市）は、水不足に悩まされていた。この地域の峰一つ越した銅山川には水がとうとうと流れていた。**写真3**の銅山疎水小史によると、「安政2(1855)年も大干ばつで井戸は涸れ、池も底をつき農民は万策尽きて（中略）庄屋たちが立ち上がり、山向こうの水をこちらに引きたい（中略）と三島代官所に「大川河水利用目論見書」を差出した。これはノミと鍬で法皇山脈をくり抜こうとするもので、代官から一蹴されましたが、銅山川疎水の着想はこの時が始まり」と伝えている。

その後、明治、大正時代にも地元有志などによって銅山川疎水計画を立てられましたが、いずれも実現には至らなかった。昭和11年に愛媛県と徳島県で銅山川分水協定が調印され、分水事業が開始されたが戦争のため中止され、通水（**写真4**）は安政2年以来96年が経過した昭和25年8月のことであった。

この銅山川疎水の話は、大規模な、広域にわたる事業、社会資本整備は個人や地域では対応できず、公的機関に委ねざるを得ないことを教えている。

この話は、四国防災八十八話 71話でも次のように紹介されている。「安政2年(1855)も大干ばつでした。井戸は枯れ、池も底をつきました。農民は万策尽きて、一勺（いっしゃく）（2ミリリットル）の水にも血を流すほど真剣になった。しかし、峰一つ越した銅山川には水がとうとうと流れています。あの水をこちらに通すことができたなら、農民が思い詰めたのも無理はありませんでした。三島・中曾根・松柏・妻鳥の庄屋たちが立ち上がり、連名で三島代官所に大川河水利用目論見書」を差し出しました。これはノミと鍬で法皇山脈をくり抜こうとするもので、代官から一蹴されましたが、銅山川疎水の着想はこの時が始まりである。その後、幕末、明治・大正時代にも、代官や地元有志や企業などによって銅山川疎水計画を立てられましたが、利害調整などもあり、いずれも実現には至りませんでした。愛媛県は内務省などにも働きかけ、昭和11年(1936)に徳島県との間で銅山川分水協定が調印され、事業が開始されました。しかし、戦争のため中止を余儀なくされ、工事開始は戦後まで待たなければならなかった。昭和25年(1950)8月24日、通水式（**写真4**）が行われました。安政2年以来、96年が経過していた。山の向こうの水が法皇山脈をくぐり、流れ込んで来ました。ワッとあがる歓声、涙をたたえて手で水をすくう老人、一升瓶に水を詰めて持ち帰る人、まことに感激の一瞬でした。」とあり、私たちに、先人の努力の積み重ねにより得た水利用の歴史を忘れてはいけないという教訓を伝えている防災風土資源である。



(愛媛県四国中央市)
 藩政期から100年以上の歳月が流れた愛媛県と徳島県との激しい分水論争を克明に描いた合田正良編「銅山川疎水史」(愛媛地方史研究会・昭和41年)



柳瀬ダムは1957年(昭和32年)に完成。この翌1958年(昭和33年)には銅山川分水の区画水が行われ、産屋の分水が実現することになった。ダムの形式は重力式コンクリートダムで高さは55.5m。洪水調節・灌漑・上水道・工業用水・発電の多目的ダムである

写真3 銅山疎水小史
 (松尾裕治撮影写真に上書き)

写真4 銅山分水を昭和25年に開始した柳瀬ダム
 (2007年撮影写真に上書き)

《得られる知恵・教訓》

この銅山川疎水の話は、大規模な、広域にわたる事業、社会資本整備は個人や地域では対応できず、公的機関に委ねざるを得ないことを教えている。

次に香川県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例を3つ選び、以下に述べる。

エ) 香川県の代表的な渇水・利水に関する防災風土資源の事例

① ひょうげまつりのルーツ(矢延平六)(高松市)(表6の番号12)

高松市香川町の新池では、旧暦の8月3日に、実った農作物でおどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩き、最後は皆がため池に飛び込むという「ひょうげまつり」(写真1)がある。

「ひょうげまつりとはひょうきんなまつりという意味で、昔、地域の人々のために新池をつくった矢延平六のご恩に報いるためのお祭りである。香川県の無形文化財に指定されている。新池を見下ろす高塚山には、矢延平六を祀った新池神社(写真2)がある。



写真1 ひょうげまつり (出典：浅野小学校のHP)

写真2 高塚山からの新池と矢延平六を祀った新池神社

この話は、四国防災八十八話 77 話でも次のように紹介されている。「旧浅野村一帯(現在の高松市香川町浅野地区)は稲作に必要な灌漑用水が少なく、干ばつに悩まされることがたびたびでした。村人たちはため池をつくる計画を立て、藩に願い出た。その陣頭に立って指図をしたのが矢延平六である。平六は、村の西を流れる香東川の水を引き入れることを考え、多くの人々が力を合わ